

N女史

玉井洋子

聞き覚えのある声はNさんである。彼女は戦後まだあまり知られていなかったアートワラワーを世に広め華々しく活躍した人である。以前私が勤務していた社（市民同友会のはえぬきでもある）。

御年九十歳を超えられ、現在車いす生活を余儀なくされているという。「退屈しかたないので何か仕事をよこせ」というのだ。こともあろうに八十すぎのばあさんに、である。いくつもの教室をとびまわり一時代をアートの席卷した彼女の無聊は察するにあまりあるのだが、同友会解散以来あうこともなくなつて三十年ぶりに聞く電話。

「うち今一人ぼっちやねん。みんないなくなつてしもた。なんや君さんも早よいかはつたなあ」「六十八歳は早すぎましたよね」「胃か肺か。酒は朝まで飲んでたもんな」「そうそう、胃とか肺とかなら分るけどなんで自分が食道ガンやねん、つて悔しがつてたんだつて」「奥さんとこにも電話してみたけどいてへん」

結局話は二人の接点である人物にいきつくことになる。「君さん」とは私の元上司君本昌久氏のことである。彼のことならエンドレ

スで語れるけれど、ふととぎれた会話の間合いにそぞろさびしさがこみあげて来る。君本さんはもういないのだ。「亡くなられたのが一九九七年（平成九）だったから来年三月で二十六年になりますね」。

そして、それから私たちは白日の闇に互いの老いを写し合い笑うしかなかった。

「私もいい年になりました。無職です」

カカカカと彼女が笑う。屈託のないその明るさと持ち前の華やかさできつと今おられる施設でも明るく過ごされているだろう。

彼女はポートピアホテルで輸入雑貨を商うご夫君ともども君本さんとは昵懇の間柄。夜の三宮で泥酔した君本さんが自身の帰る方向と真逆にタクシーを走らせて、夜半にお宅を訪ねても嫌な顔せず迎え入れ、朝には出勤するご主人の車で高取山の彼の自宅付近まで送っていかれていたそうなのである。いつ何時現れるかもしれない彼を夫婦はひそかに「空襲さん」と呼んで慈しんでいたようだ。

ちなみに、私の知るかぎりでは、深夜のこの招かれざる客を受け入れていたお宅は他に灘区にもう一軒、長田と須磨に何軒かあったはずである。誰でもがこんな形で遇されるものではないだろう。功罪相半ばする人懐っこい性格のこの人はなんとという星の下に生まれ

たものだろう。人情でひととひとがつながっていた古き良き時代のお話ではある。

君本昌久氏

一九八二年第12回全国空襲戦災連絡会議フィ
ールドワーク 佐世保 弓張岳にて

